

Q27

## 筋肉痛や関節痛を感じたら どうしたらいいですか？

抗がん剤の投与方法として、点滴静脈注射や飲み薬がありますが、いずれの投与方法においても抗がん剤は、血液の流れに沿って全身をめぐるため、抗がん剤による副作用は、からだのあらゆる場所に出現します。そのひとつが筋肉痛・関節痛です。抗がん剤による治療を行っている患者さんに筋肉痛・関節痛がでた場合、主に以下の3つの可能性が考えられます。

### 1) 細菌感染による発熱に伴う場合

抗がん剤のおもな副作用として血液中の白血球が減少することがあります。白血球が減少すると細菌などに対する免疫力（抵抗力）が低下するため、結果として細菌に感染して発熱することがあります。特に高熱が出る前には、からだ中の筋肉痛・関節痛が出現する場合があります。この場合、もしも放っておくと免疫力が低下しているため全身に細菌がいきわたり、感染が重症化してしまうこともあるので、細菌に感染したかどうかの検査を受ける必要があります。また、場合によっては入院をよぎなくされる場合もあります。つまり、抗がん剤治療後に高熱を伴った筋肉痛・関節痛がでた場合は、早急

な対応が必要です。

### 2) G-CSFを注射した場合

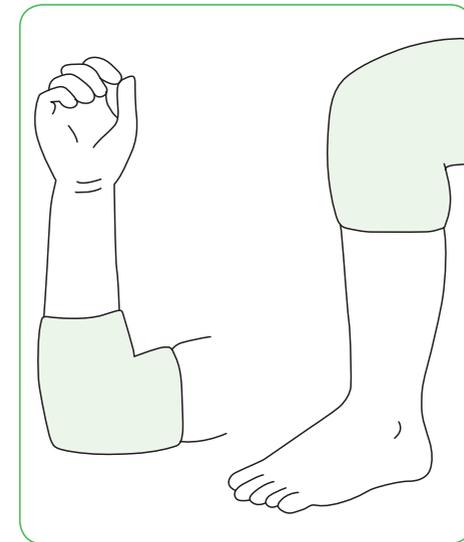
抗がん剤治療後に減少した白血球を増加させるために、G-CSF（顆粒球コロニー形成刺激因子製剤：商品名ジーラスタ、グラン、ノイトロジン、ノイアップなど）という薬を注射することがあります。G-CSFは骨髄での白血球の産生を促進する薬ですが、その副作用として、全身のだるさとともに筋肉痛・関節痛（特に腰痛）が出現することがあります。通常は経過とともに症状は軽減しますので、症状が持続している間は無理をせず、可能な限り安静を保ってください。

### 3) 抗がん剤の副作用の場合

ある種の抗がん剤、特に非小細胞肺癌、乳がん、胃がんなどで投与されるパクリタキセル（商品名パクリタキセル「NK」、タキソール、アブラキサン）でよくみられることがわかっていますが、どの抗がん剤においても出現する可能性があります。他の副作用と同様、症状には個人差がありますが、その発生機序については詳しいことはわかっていません。症状は抗がん剤投与後2～3日から1週間までにあらわれることが多いようです。また、抗がん剤の副作用のひとつであるしびれやこわばりとともに筋肉痛・関節痛がでることもあり、普段の生活に支障をきたすこともあります。症状が強く日常生活に支障をきたすようであれば、マッサージ、温浴、痛み止めの飲み薬や坐薬、湿布、さらに症状が重篤な場合にはステロイドなどで痛みを和らげることができます。

また、乳癌のホルモン療法で用いられるアロマターゼ阻害薬（商品名フェマラ、アリミデックス、アロマシンなど）では関節のこわばりや関節の痛みなどの症状が出現することがあります。時間の経過により症状が改善することが多いですが、痛み止めが必要になることもあります。また、アロマターゼ阻害薬による関節痛やこわばりに対して、鍼治療が効果的な場合もあります。治療が継続できない場合には別のアロマターゼ阻害薬かタモキシフェンへの変更を行います。この関節症状は炎症によるものではなく、エストロゲンが枯渇したために2次的に起こると考えられています。

以上のように、筋肉痛・関節痛に関しては経過とともに軽減する場合もありますが、早期の対処を必要とする可能性もあります。症状が軽くても“筋肉痛・関節痛”を感じたら、まず主治医や看護師にご相談下さい。（大山高廣）



#### 参考文献

- 1) T. Tamura, et al.: Jpn. J. Cancer Res.86:1203、1995(G95-0750)
- 2) 野田起一郎 他:癌と化学療法23(3):317、1996(G96-0077)
- 3) T.Kubota, et al.:J.Surg.Oncol.64:115、1997(G97-0705)
- 4) 吉崎陽 他:日本癌治療学会誌30(5):730、1995(G95-0906)
- 5) 日本乳癌学会:乳癌診療ガイドライン1治療編:159-166、2015
- 6) Crew KD, et al.:J Clin Oncol. 28(7) :1154-60、2010